

自己開放性 (Self-Disclosure) に関する一研究*

——外向性・内向性との関係——

上 田 敏 見**

(心理学教室)

I. 問 題

青年の教育を考える場合、一般に自己閉鎖的なかれらがだれに真実の自己を打ちあけるか、そのかわり方は如何、などが重要なひとつの手がかりを与えてくれるであろう。この点に関し、Jourard S.M. (1958) は、他人に自己を知らせる過程、自らが心から思っていることや感じていることを正直に自発的に他人に表出する行為を self-disclosure (自己開放性) と名付け、その量的測定の方法を種々開発して来た (1958, 1961, 1970)。これらの方法を用いてなされた多くの研究によれば、自己開放の対象、すなわち target person には「信頼できる人」、「理解ある人」が選ばれ易いこと、パワー (power) の認知が自己開放性と深くかかわりをもつことが明らかである (Jourard, 1963; Truax, C. B., & Carkhuff, R. R., 1965; 藤山, 1972; 久世, 1972a; 久世, 1972b)。

一方、Hendrick, C. & Brown, S. R. (1971) は、外向性群と内向性群に2種の架空人物 (外向性者と内向性者) に対する評価を行なわせたところ、長期の友人としての信頼性という場面では外向性群は両架空人物を同程度に選んだが、内向性群は外向性架空人物よりも内向性架空人物をより多く選ぶという事実が見出された。もしこのように内向性の者が内向性の者により多くの信頼感を持ち、外向性の者の内向性者・外向性者に対する信頼感に差がないことが一般であるとすれば、自己開放する者の向性とその target person の向性の間には、およそ次の関係が予測されるであろう。

仮説 1. 外向性者の外向性者に対する自己開放量は、外向性者の内向性者に対する自己開放量と有意に異ならないであろう。

仮説 2. 内向性者の内向性者に対する自己開放量は、内向性者の外向性者に対する自己開放量より有意に多いであろう。

本研究の目的は以上の2仮説の検証を試みることである。

* A Study of Self-Disclosure — Its relationship to Introversion and Extraversion.

** Toshimi Ueda (Department of Psychology, Nara University of Education, Nara)

Ⅱ．方 法

測定用具

(1) モーズレイ性格検査 (MP I : 1962年 修正版)

向性に関する24項目, 神経質傾向に関する24項目, 緩衝項目12項目, 検証尺度20項目の合計80項目より成るが, 本研究の分析に用いられたのは向性に関する24項目のデータのみである。

(2) 架空の target person の性格を記述した用紙

モーズレイ性格検査と淡路式向性検査を参考にして外向性および内向性を表現する文を選出し, それぞれのイメージをより明確にとらえ易くするため, それらの文はできる限り短かい, 簡潔な語句表現にまとめられた。Aが明らかに外向的な人物, Bが明らかに内向的な人物と受けとられるよう工夫をこらし, 最終的には次のように決定した。

〔A〕 Aは社会的・開放的で, 動作や感情の表現にためらいのない人です。たとえば次のように特徴づけることができます。

話し好き。交際(つきあい)が広い。にぎやかなことが好き。人づきあいがよい。陽気。

動作がきびきびしている。気がきく。のびのびとふるまう。活動的なことが好き。世話好き。

〔B〕 Bはひっこみ思案で, 人とのつきあいをさけるような人です。たとえば, 次のように特徴づけることができます。

いつも聞き手にまわる。交際(つきあい)がせまい。もの静か。友だちがでにくい。内気。人の評判を気にし易い。きまじめ。はずかしがり。用心深い。ひかえめ。

(3) 自己開放性尺度

Jourard (1958) が開発したSD-60(60項目から成る自己開放性インベントリーで, 6領域に分けられ, 各領域に10項目ずつ含まれる)と, 1971年に Jourard が改訂したSD-40(40項目から成り, 領域区分はない)とが邦訳され, それに多少修正が加えられて, 5領域(態度と意見, 趣味, 勉強, 人格, 身体)に各8項目を含む合計40項目の自己開放性尺度が試作された。修正が加えられたのは, 主として日米間の風俗慣習の差異が予想された項目(たとえば宗教の項目)であった。この尺度作成に際し, 各領域の見出しはつけず, 領域間に1行だけのブランクを設けるにとどめた。

なお, A・B2人の架空の target person に対する被験者の評価を得るため, この尺度の後半部に, Hendrick & Brown (1971)の研究で用いられた対人評価の7つの型(知覚された類似, 好き, リーダーとしての選好, パーティーなどでの話し相手としての興味, 理想的性格, 道徳性, 信頼感)と「理解ある人」を加えた8個の2者択一形式の質問文を付加した。たとえば, 信頼感についての質問は, 「A, Bのどちらの人を, より信頼できると思いますか」であった。

被 験 者

奈良文化女子短期大学の1回生合計307名について実施したが, 本研究の分析に用いられたのはモーズレイ性格検査における向性得点によって抽出された, 外向性者30名および内向性者30

名のデータである。

手 続 き

最初にモーズレイ性格検査が1972年6月2日に実施された。与えられた教示は次の通りである。

「これから行なうのは、一種の性格検査で、皆さんの成績とは全く関係のないものです。次の各質問について、自分の性質にあてはまれば○、あてはまらなければ×、どちらとも決められない時には△を□の中へ記入してください。質問の意味をあまり深く考え過ぎないで、ふつうの会話の質問に答えるつもりで気軽にさっさと答えてください。どの質問にも『正しい答』とか『まちがった答』とかはありません。順々に全部の質問に答えてください。質問は全部で80個あります。」

このように80問について、実験者が一定間隔で1問ずつ読みあげ、被験者に反応を求めた。

1週間後、すなわち6月9日に自己開放性尺度が実施された。架空の target person の性格を記述した用紙と自己開放性尺度が同時に配布され、前者については次のような教示が与えられた。

「ここに、A・B 2人の性格が書かれています。これをよく読んでAとBがどのような人物かを想像し、それぞれのイメージを作り上げてください。」

これにひきつづき、自己開放性尺度につき次の教示が与えられた。

「さきほどの紙に示されたA、B 2人の人物を、あなたの身近かにいる人であると仮定してください。次に、あなたに関係のある話題が40項目あります。これらの話題について、あなたが話すとすれば、A、B どちらの人物にどの程度話すでしょうか。その程度を次の数字で答えてください。

0…この話題については何も話さない。

1…この話題についてはおよそのこと、だいたいのことを話す。

2…この話題についてはじゅうぶんくわしく話す。

なお、話す相手はそのつど必ずAかBのどちらか一方に決めてください。」

この場合にも、40問のそれぞれが一定間隔で読み上げられ、被験者の反応が求められた。終了後、回答の脱落がないかどうかを確かめてから2者択一形式の質問に移った。「次の質問のそれぞれについて、さきほどの人物のAかBで答えてください。」という教示が与えられ、8個の質問に対する反応が求められた。

Ⅲ．結 果

まず、モーズレイ性格検査における向性得点にもとづき、最高得点者から順に上位30名、最低得点者から順に下位30名が選ばれ、前者を外向性群、後者を内向性群とした。外向性群は20点以上の者で構成され、その得点平均は21.8、内向性群は7点以下の者で構成され、その得点平均は5.2、両群は当然のことながら有意に異質群であった($t = 61.48$, $df = 58$, $p < .001$)。

以下に述べる分析はすべて上記の2群について行なわれたものである。

自己開放量は、0、1、2のいずれかで示され、得点が高いほど自己開放性の著しいことを示している。表1は外向性および内向性の target person に対する外向性群、内向性群の自己開放量を、領域別に表示したもの、表2は表1にもとづく2(被験者の向性)×2(target personの向性)×5(領域)の分散分析の結果を示したものである。

表 1 自己開放量平均値

領 域	態度と意見		趣 味		勉 強		人 格		身 体		平 均	
target person	外向	内向	外向	内向	外向	内向	外向	内向	外向	内向	外向	内向
外 向 性 群	7.37	2.37	8.40	2.00	4.70	3.83	6.50	1.90	6.00	1.43	6.59	2.31
内 向 性 群	3.87	4.43	5.20	4.00	1.60	6.00	2.33	4.07	2.83	3.97	3.17	4.09
平 均	5.62	3.40	6.80	3.00	3.15	4.92	4.42	2.99	4.42	2.70		

表 2 分数分析表

Source	df	MS	F
Between Ss			
A (被験者の向性)	1	57.66	7.00*
Error (b)	58	8.25	
Within Ss			
B (target person の 向 性)	1	328.56	15.44**
A × B	1	1181.61	55.53**
Error (w ₁)	58	21.28	
C (領 域)	4	37.70	19.33**
A × C	4	2.02	1.04
Error (w ₂)	232	1.95	
B × C	4	123.93	24.02**
A × B × C	4	1.54	0.30
Error (w ₃)	232	5.16	

**…… $p < .01$ *…… $p < .05$

表2の被験者自身の向性および target person の向性の有意な主効果は、外向性者が内向性者に比べて自己開放量が有意に多く、また有意に多量の自己開放性をうけることを示している。(被験者の向性) × (target person の向性) の交互作用が有意になり、さらに検定をすすめた結果、外向性者は内向性者に対してよりも外向性者に対して有意に多量の自己開放をしたが($t = 2.68$, $df = 58$, $p < .01$)、内向性者の両 target person に対する自己開放量には有意差を認めることができなかった。

次に、領域の有意は主効果は、各領域における自己開放量がそれぞれ異なっていることを示している。なお、(target personの向性)×(領域)の有意な交互作用は、両 target person に対してなされた自己開放量が領域によって異なることを明らかにした。

以上のように、領域をこみにして処理すれば当初の仮説を支持しなかったが、表1によれば「勉強」の領域において予測された交互作用が認められそうである。そこで念の為、領域別に2(被験者の向性)×2(target personの向性)の分散分析を試みたところ、「勉強」の領域の交互作用は有意($F=13.34$, $df=1, 58$, $p<.01$)となり、外向性者の両 target person に対する自己開放量には有意差がなく、内向性者の自己開放量は外向性者に対してよりも内向性者に対して有意に多い事実が示された($t=5.37$, $df=58$, $p<.001$)。「態度と意見」、「趣味」、「人格」、「身体」の領域においては、共通に、外向性者は外向性の target person に対して有意に多くの自己開放性を示し、内向性者の両 target person に対する自己開放量は有意に異なるものではなかった。

表3 架空の target person に対する評価

被 験 者	外 向 性 群			内 向 性 群		
	外向	内向	χ^2 - value	外向	内向	χ^2 - value
架空の target person						
知 覚 さ れ た 類 似	30	0	28.04***	0	30	28.04***
好 き	28	1	23.32***	18	12	1.20
リーダーとしての選好	29	1	24.30***	29	1	24.30***
パーティでの話し相手	30	0	28.04***	30	0	28.04***
理 想 的 性 格	23	6	8.82**	29	1	24.30***
道 徳 性	9	18	2.38	9	20	3.85*
信 頼 感	9	20	3.85*	5	25	12.04***
理 解 あ る 人	17	12	0.86	1	28	23.32***

(注) $df=1$, *** $\cdots p<.001$ ** $\cdots p<.01$ * $\cdots p<.05$

次に表3は、外向性および内向性の target person に与えた被験者の評価を示したものである。これによれば、「好き」では外向性者は外向性者を有意に多く選んだが($\chi^2=25.14$, $df=1$, $p<.001$)、内向性者においては両 target person 間に有意の差を示さなかった。これに反し、「道徳性」「理解ある人」では、外向性者は両人物間に評価の有意差を示さなかったが、内向性者は内向性者をより多く選んでいる。「リーダーとしての選好」、「パーティなどでの話し相手としての興味」、「理想的性格」では、被験者の向性の如何を問わず、外向性者が有意に多く選ばれ、「信頼感」では、両被験者群とも、内向性者を有意に多く選んだ。

Ⅳ．考　　察

本研究で得られた主な結果は、外向性者は外向性者に対してより多量の自己開放性を放出し、「勉強」の領域以外では、内向性者の自己開放量は両 target person 間に有意の差を生じなかったということであった。また、表3に示されたように、被験者自身の向性の如何にかかわらず、内向性の target person はよりいっそう信頼できると評価されたのである。

もし予測されたように、信頼と自己開放量の間に密接な関係が存在するならば、内向性者に対する両被験者群の自己開放量は外向性者に対するそれより有意に多くなるはずである。しかし、事実は予測に反した。特に外向性者についていえば、Jourard (1963), Truax & Carkhuff (1965), 久世 (1972a, 1972b) らの示唆にもかかわらず、「信頼感」は必ずしも自己開放性を規定する決定的要因ではなかったといえよう。

「知覚された類似」においては両被験者群ともに自らと同じ向性の者を選んだ。このことは外向性者においては「知覚された類似」が自己開放性の要因としてはたらいだ事実を反映するものとも考えられるが、内向性者においては事情は異なるものといえよう。

次に、外向性者は「好き」、「リーダーとしての選好」、「パーティでの話し相手」、「理想的性格」において、外向性者を有意に多く選び、内向性者も「リーダーとしての選好」、「パーティでの話し相手」、「理想的性格」において外向性者を有意に多く選び、さらに、「好き」においても、わずかに有意水準を逸したが、外向性者をより多く選ぶ傾向を示した。このような一連の結果は、外向性者の自己開放性に関しては「信頼感」という要因よりもこれらの要因の方が大きく作用したようであり、内向性者の自己開放性には「信頼感」要因とこれらの要因が併合して作用したことを示すものと考えられるであろう。Worthy, M., Cary, A. L., & Kahn, G. M. (1969) の報告によれば、より親密な自己開放は、より好きと感じた対象に向って放出されるので、上述の要因の中では「好き」という要因が最も強力に作用したといえるかも知れない。

「勉強」の領域においてのみ、仮説は支持され、外向性者の両 target person に対する自己開放量は有意に異ならず、内向性者の自己開放量は内向性の target person に対して有意に多いことが明らかにされた。これは次のように解される。すなわち、外向性者の場合、他の領域においてはさほど大きく作用しなかった「信頼感」要因がここでもかなり重視され、内向性者にはそれが絶対不可欠の要因として作用したのである。このように、「信頼感」が自己開放性とりわけ強いかわりをもつ領域と、かわりの少ない領域とがあることが示唆され、今後の研究においては、さらに精細な自己開放性尺度を用いての分析がのぞまれるのである。

この点に関し、Vondracek, F. W. (1969) は、自己開放性の測度は少なくともその2つの側面、量と内容の深さを考慮に入れるべきであると強調しているが、本研究で用いた自己開放性尺度は個々の話題の内容の深さをチェックできなかったのである。おそらく、この不備が本研究の結果を不分明なものにした1因であろうと考えられる。

なお、target person の認知がすべての被験者に一様になされたかどうかの確認、target person の評価をポイント・スケールに改めての再検討、性差の分析など多くの問題が残されたが、

これらの点については今後の研究に委ねたい。

V. 要 約

本研究の目的は、自己開放性の対象となる者の向性と自己開放する者の向性の関係に関連し、(1)外向性者の外向性者に対する自己開放量は、外向性者の内向性者に対する自己開放量と有意に異ならな
いであろう、(2)内向性者の内向性者に対する自己開放量は、内向性者の外向性者に対する自己開放量
より有意に多いであろう、という2仮説を検証することである。被験者は女子短大生307名から抽
出された外向性者30名、内向性者30名である。

先ずモーズレイ性格検査を施行し、次に架空人物（外向性と内向性の2人の人物）のイメージを確
立させ自己開放性尺度を用いて5領域の自己開放量を測定した。最後に架空人物に対する評価を求め
た。

得られた主な結果は次の通りである。

- ① 仮説1および2は、「勉強」の領域において支持された。
- ② 「勉強」以外の領域では、外向性者は、外向性者に対してより多くの自己開放量を示した。
- ③ 「勉強」以外の領域では、内向性者の自己開放量は、target personの向性と有意の関
係を示さなかった。

引 用 文 献

- Hendrick, C., & Brown, S. R. 1971 Introversion, extraversion, and
interpersonal attraction. *J. pers. soc. Psychol.*, 20, 31-36.
- Jourard, S. M., & Lasakow, P. 1958 Some factors in self-disclosure
J. abnorm. soc. Psychol., 56, 91-98.
- Jourard, S. M. 1963 *Personal Adjustment*. New York: Macmillan.
- Jourard, S. M. 1970 Self-disclosure and self-acceptance. (in Breed,
G., & Jourard, S. M. *Research in self-disclosure: Annotated
Bibliography*)
- Jourard, S. M. 1971 *Self-Disclosure — An Experimental Analysis
of the Transparent Self* — New York: Wiley-Interscience.
- 蔭山英順 1972 いわゆる過疎地域の家族関係 (1) — 中学生の実態について —
日本教育心理学会第14回総会発表論文集 P. 240-241
- 久世敏雄 1972 いわゆる過疎地域の家族関係 (2) — 両親に対する愛情の認知等と困った場
面における自己開放性について — 日本教育心理学会第14回総会発表論文集
P. 242-243
- 久世敏雄 1972 青年と世代の断絶 [現代青年の社会参加 金子書房刊]
- Truax, C. B., & Carkhuff, R. R. 1965 Client and therapist
transparency in the psychotherapeutic encounter. *J. counsel. Psychol.*,

12, 3-8.

Vondracek, F. W. 1969 Behavioral measurement of self-disclosure
Psychol. Reports, 25, 914.

Worthy, M., Gary, A. L., & Kahn, G. M. 1969 Self-disclosure
as an exchange process. *J. pers. soc. Psychol.*, 13, 59-63.

(附記) 本研究の資料の分析にさいしては天津市立晴嵐小学校、宮垣福代教諭の協力を得た。誌
して厚く謝意を表するものである。